

井深 対談

知恵の肥満児にならないよう

好きでたまらない石油のにおい

井深 本田さんの幼児時代で、有名な話は毎日お米屋さんへ行って、精米ポンプをみておられた、という…

本田 いや、本当の話ですよ。私は浜松在の生れで、タンボ道をおぶってもらっては精米所へつれて行ってもらった。石油の発動機でね。それがトントンかわりばんこに動いて、米をつく。プーンと石油のいいにおいがする。何ともいえず、面白くてね。毎日毎日つれて行ってもらっていたんです。

井深 毎日どれくらいの時間みておられた？

本田 まあ、1日中（笑い）。

井深 石油っていうのは、いいにおいだった。

本田 全く、あのにおいはたまらない。今みたいにいろいろのにおいがミックスされてしまっていると、ちっともいいにおいじゃありませんな。

井深 小さい時、自動車がさーっと走っていったあとなんかの、あの魅力的なにおい、忘れられませんね。

本田 いちど、おぶって行ってくれる人がいけませんでね。ひとりでヨチヨチたんぼのあぜ道を歩いて行った。そしたら田ンぼのなかへころがり落ちた。あわやというところへ、若い、きれいな娘さんが通りかかって、助けあげてくれたんです。それが、偶然精米所の娘さんだった。

井深 本田さんの初恋の人だな（笑い）。

本田 冗談じゃない。こっちは、3つ、4つだった（笑い）。

井深 その「ストン、ストン」を毎日見に行っただってというの、何か理由があったの。

本田 理由なんかない。見てりゃいいんです。

井深 リズムがあって、ダイナミックでね。

本田 荷重がかかると「トン、トントン」とやって、荷重がないと、「トン、スカスカスカ」って…そういうふうにおートマチックになってるわけでその雰囲気は何ともいえない。いまでいえばそのダイナミック…だけど、まあ、わけてないね。好きだから見ていただけだ1日中、見ている。

井深 ハッハッハ。

本田 飯をくれなきゃ、くれなくてもいいんだ。何でもいい、1日中見てる。

井深 石油発動機が最初だったんですかねえ。

本田 石油発動機ですよ。

井深 ぼくも何かそれに似た覚えがあるな。目覚まし時計はいくつ、ぶっこわしたかわからないし…

本田 いや、ぼくも壊したなあ。

井深 興味を持つものが、むかしのことだから、そうないからね。テレビがありゃ、テレビばっかり見てたろうけど、何もないものね。何かさわれるもので、手に負えるものにどんどん興味が集るわけですよ。

本田 それからこんど、自動車がやって来たっていうころにはね、“すばらしいな、運転手になりたいなあ！”って思った。運転手なんて神様みたいに見えた（笑い）。

井深 むかしの子どもは、電車の運転手とか、自動車の運転手とかにあこがれたね。

本田 私らのところで自動車を見かけるようになったのは、小学校の2、3年ごろだったなあ。自動車がきたら、そりゃもう、たまらなくなったものだ。むかしの自動車はね、止まれば必ず、オイルがしみて落ちてるんだ。そのオイルのにおいを…気が遠くなるような心持で嗅いだなあ。

井深 ハッハッハ。

本田 とにかく鼻をね、オイルのところにくっつけて…そりゃ、気が遠くなるような感じだった。いまでもその記憶が残ってるよ。その代り、本を読むのなんて大嫌い。おやじもおふくろも、勉強しろとはいわんかったね。それでいて親父が非常にやかましい人でね、何か…時間をまちがえること、非常におこった。だから私は学校へ行くの、大嫌いだったけど…授業は嫌いだったけど、学校にちょっとでも遅れると、もう、泣けて泣けてしようなかった（笑い）。

井深 おもしろいね。

本田 うちが鍛冶屋だったから弟子がいる。その弟子に自転車のうしろにのせてもらって、学校まで送ってもらったこと、覚えてますよ。だから私はいまだに、時間で人に迷惑かけたこと、いっぺんもない。

苦勞は、買ってでも…

井深 それで、どういうきっかけで、東京の修理屋さんに弟子入りしたんです？

本田 そりゃあね、私は勉強嫌いだからね。嫌いだし、やる意志もないしね。親も嫌いなのに無理にやることもない。まあ、上の学校へ行くということは非常に希望していたようだが、本人が意志ないんだから（笑い）。そのころ「輪業之世界」という雑誌がありましたね。

井深 ありましたね。

本田 うちの親父が自転車屋やってることから、とっていたんです。

井深 鍛冶屋さんのほかに自転車屋さんもやってた？

本田 ええ途中から。うちの親父も非常に器用でね。

井深 そりゃま、本田さんに縁がないことはないな。そのころ輸入ですか？「ラージ」なんて車あったね。

本田 ええ、「ラージ」とか「プレミア」とか「ラレー」とか…修理販売。

井深 日本製はなかった？

本田 日本製もありましたよ。

井深 なかなか高級だったな。チェーンのどこ、カバーしてあった…。うちのじいさん、年とってたけどハイカラで、人力車なんかで出勤しない。“俺は自転車で行く”とって、郡役所へ自転車で通ってたよ。

本田 そりゃもう、大変なハイカラだ。

井深 郡長だからおかかえの人力車がいるわけだ。仕方ないから弁当だけのせて、人力車があとを追っかけていく（笑い）。じいさんは自転車でスーッといっちゃう、そのあとから人力が弁当運んでゆく。自転車の話聞いて思い出したな（笑い）。

本田 ところでその「輪業之世界」という本に、東京のオート商会っていう、自動車の修理をするところの広告が出ていたからね。そこへ自分で手紙を出した。そしたら“お前がよくやるんなら、入れてもいい”っていうような返事がきた。

井深 ははあ、手紙で就職をたのんだ。

本田 それで親父を口説いて、そして2人で上京したんですよ。行李を持って。はじめての東京だ。おやじと2人でね。朝の、暗いうちに出かけて、着いたのが7時頃ですからね。いまアメリカへ行くより遠かったんですよ（笑い）。

井深 それ、何年のこと？

本田 大正10年ごろになるんじゃないかな。震災のちょっと前。

井深 中学校を出てから？

本田 中学校じゃなくて、高等小学校。そりゃ、親父にしたら、大英断でしょうね。親父も、東京っていうもの、はじめて来たんだから。

井深 あ、そう。

本田 親父が送ってこないと、オート商会で預かってくれないからね、ぼくを。ぼくはやりたーい一心だけど、息子を見ず知らずの東京へ置くんだから、そりゃ親父の方が大決心だ。

井深 食うに困ってるわけじゃないしね。

本田 自動車修理をやりたーいばっかしに、だ。

井深 うーん、よく決心されたなあ、おやじさんも。

本田 勉強もしないし、すねてばかりだし（笑い）絶対自分の言い出したことはやるんだから、おやじも呆れ返って、ついに折れたんだな。

井深 で、お母さんは？

本田 ええ、おふくろもまあ、賛成しましたよ。“お前がそういうなら仕方がない、本人の好きなことするのはいいことだ”って。しかしその勤めたあとが大変だった。半年間子守りですからね、毎日毎日。子守りばかりやって、自動車に触られることなんてない。

井深 で、何人ぐらいの従業員がいたんです。

本田 ええと、6人ばかり弟子がいてね。1番下にはいったばかりの弟子はそりゃ子守りですよ。朝は女中より早く起きて掃き掃除してやらないと。そうすれば、女中がぼくの井に、毛のついた豚汁の皮のところを1片くらい余計にくれるから（笑い）。

井深 毛のついた、はよかった。

本田 ちょっと盛りがよかったりするしね。女中より早く、真暗いうちに起きて、女中のやることやってやる。そうしないと、腹が減ってしょうがない（笑い）。もう毎日が、いやでいやでたまらなかつたですよ。もう逃げて帰ろうと思ってね。行李をナワで結わえて、2階の屋根から、そおーっと下して、自分は電柱を伝わって、下へ降りた。ところがね、その時おやじのあのおこる顔と、おふくろの泣く顔が、交互に映ってきてね（笑い）。

井深 なかなか劇的だね。

本田 もう少し我慢をするよりしょうがない。自分が言い出して来たんだから、と。おやじが行っていったんじゃなし…もう少し我慢しようと、また電柱を登って、行李をひき上げるの（笑い）。4、5回そういうことありましたね。

井深 まいったね、こりゃ。4、5回も。よく我慢したなあ。

本田 だからぼくに言わせると、そういうときにも我慢してきた。…自分の意志に反することでも我慢し通した経験があるから、いま経営のことでも、いろんな我慢しなけりゃならん…だけどそのときのこと思えば、何でもないね。

井深 うん、うん。

本田 だから「苦労は買ってでもしろ」っていうようなことね、古いかも知れんけど。それを、もし、のうのう坐ってきてたんなら、経営だって、最初のうちに、投げるときがあったらう。いいことばかりはないんだからね。

井深 世の中じゃ、いい面ばかり想像するからね。

本田 私はそう思いますよ。お母さま方は、いいことばかりを…きれいごとばかりに世の中を見て、子どもに教えるでしょ。あれ、どうも合点がいかんなあ。

井深 うん、うん。

本田 もっとわれわれが生きていくには、辛いことがあるんだ、死ぬことを教えてないなあ。きれいごとを教えても。

井深 そりゃもう、ほんとだ。

本田 「そんな辛けりゃ、まあ、やめなさい」とか、安全なことばかり教えてる。

井深 そうそう

本田 私はね、安全っていうことはね。安全でないことを知っている人が、本当に安全なことを行えるんだと思うね。不安全を知らん人が、安全なんて、わかりっこないよ。ぼくはそう思うね。

「甲」は唱歌だけ

井深 もうちょっと前へ戻って、もっと幼いころのことを・・・

本田 こないだね。ほら、あんたが私のための祝いの会をやってくれさせたでしょ。あのとき田舎の母校で、3年間続けて面倒みてくれた先生が来てくれたんですよ。青木先生っていう方。そのころの悪童仲間 2 人と来てくれたんですよ。その先生を見たときに思い出したんですよ。

井深 小学校のときの先生？

本田 高等科の1年から3年まで受け持ってくれた先生。田舎の方じゃ、まあ、中学校の代用みたいなものでしたでしょうね。でね、私もまあ、その先生にはずい分叱られたですよ。もうねえ、書き方とか、読み方とか、綴り方なんか大嫌いだったですからね。そのときになると、どっかへ逃げちゃうですよ(笑い)。弁当持って逃げちゃう(笑い)。

井深 弁当持ってね。

本田 やっぱり、そんなふうには逃げたときのことですがね、もう腹が減ってしょうがない・・・いまでもあるが二俣城址っていうのがあって、それがすぐ裏山なんです。そっちの方へ遊びに行っちゃったが、腹がへってしょうがない(笑い)。飯を食おうと思ったけどむろん時計はない。田舎では野良へ出たって、腕時計持ってるわけないんだから、ゴーンという鐘の音で、みんな飯を食うわけですよ。

井深 お寺のね。

本田 それを聞かないと・・・どうも、飯、食えないんですね。だから条件反射なんですよ、ぼくに言わせれば。仕方ないから、寺へ行って、ゴーンと撞いたですよ(爆笑)。

井深 ハハハハハ、寺の鐘を、自分で。

本田 ええ。そいで、そのカネの下で悠々と飯を食ってたんですよ(笑い)。そうしたら、・・・鐘の音が1時間ぐらい早いでしょ。学校の小使いがフツとんできて、ぼくが撞いたってわかったから、「コラッ」って、うしろのエリがみ、つかみ上げられて、そりゃ、もう、青木先生の前で、目の飛び出す程、叱られちゃったよ(笑い)。

井深 ハハハハハ。

本田 撞いておいて、逃げりゃよかった(笑い)。本人は悪いことしたと思ってないんだからねえ、その下に悠悠といる(笑い)。いま考えりゃ、馬鹿なことしてるね。

井深 飯を食べる前提条件だったんですね。

本田 とにかく村の時計、1時間みんな狂わしちゃったんだから（笑い）。ところで、いま言ったように読み方、書き方は嫌いだが、理科とか、そういうのは先生より知ってるんですよ。知っているも、ね、試験っていうのは全部、綴り方の試験でしょ？（笑い）

井深 そりゃそうだ。筆記試験だから。

本田 それが表現できないから、みんな丙なんですよ、ぼくは。甲のものは歌だけ。

井深 歌？！あ、そうか…

本田 え、唱歌だけ。歌っていうのは筆記試験も何もないでしょ。歌ったもの、ズバリが試験だからね。唱歌だけ、だから甲で、あとのものは丙。乙なんて少なくて、丁とか…

失敗して覚えたもの

本田 そんな通告簿（注・成績表）を期末におやじやおふくろに見せなきゃならない。

井深 そりゃそうだ。

本田 判を押してもらわなきゃならないですよ、「本田」っていう判を。ところが昔の人は堅いものだから、はんというものは自分の首といっしょだ、くらいに思って親父は肌身離さず持ってるわけだ（笑い）。ぼくは、しょうがない、と思って、自分の器用さを生かしてね、自転車のペダルのゴムね…

井深 うん！

本田 あれでね、「本田」と彫って、判をついちゃったんですよ（笑い）。

井深 ハハア、元気いいね。

本田 それ話したらね。同じ思いの連中がね「俺のもつくってくれ、つくってくれ」って、注文、殺到したわけなんですよ（笑い）。

井深 ハハハハ、こりやおもしろい。

本田 ぼくは得意になって、作ってやったんですよ。そして、みんなぼくのつくったはんを押して、持っていったわけですよ。そしたら翌の日になったら「本田こっちこい」って職員室へ呼ばれたですよ。

井深 ほう。

本田 「きょうは悪いことしてないのに、何でよばれたんだろ」（笑い）「ここへ立ってろ」っていわれるんだよね。「おかしいな、おかしいな」…自分で考えたって、全然悪いことしてないからね。

井深 悪いことしてない（笑い）。

本田 やっぱりバレちゃってたんだな。

井深 どうしてバレたんだろ。

本田 俺のは左右同じでどう彫っても「本田」なんですよ。ほかの人のたとえば、中島とか佐竹とかみんな反対の字になっちゃってる（笑い）。これですぐバレちゃった。そりゃ知

らんかった（笑い）。

井深 そりゃ知らんかった、か。ハハハハ。

本田 だから俺はその時はじめて、はんは右が左に、左が右になるってこと、知ったんよ。

井深 「井深」なんてのも、まずいね。

本田 おう、「井深」もまずい、頼まれたってもう作らん（笑い）。いまの子どもでも、判は反対になるってこと、知らないでしょ。本当に俺みたいに失敗しないと（笑い）。ぼくのいろいろの哲学的なことなんか全部子どものときからの失敗の積み重ねだ。本当にやったことからきてるね。

井深 実践のうえだな。

本田 「こうなんだ」って、教わったものと、自分が失敗して覚えたものとは、桁がちがうね。価値が違う、同じものであっても。人から教わったのと、答は同じであっても。利用価値が、あと、うんと広がっていくね。

井深 教育というのも、ただ教えるんじゃなしにね、切羽つまってやらなきゃならん、やるために、何か知らなきゃならん、という状態で行われると、興味だって湧いてくる。いまは、ただ、10何年間、与えっぱなしでね。入学するための必要性だけというのは、まちがい。

本田 入学するための じゃなくて、人生ってのは、もっと長い期間あるんだからね。そのために全力を投入すべきものを、ね・・・どうもお母さま方みても、どこかへ入学するために苦労しているんだなあ。こりゃおかしいね。

井深 入学するためであり、こんど卒業していいポジションにつくための苦労でね。それから企業へはいつでも、上へ登るための競争しかないんでね。仕事っていうものの楽しさとか、苦しさとかいうものを味わおうとしないんだよね。

自動車の下へもぐった喜び

本田 それからもう1つ・・・小学校2、3年の頃だと思うんでしょ。隣が石屋なんですよ。コツコツ、コツコツ、地蔵さま、彫ってるんです、石屋の親父が。その鼻がどうしても気に入らないんだな。ぼくのイメージとちがうんですよ。あれを直せばいい、と思って狙ってたらその親父が飯食いに行った留守だった。帰ってくる前と思って、ノミ持ってチンチンとやったら、鼻、ポロっとかけちゃった（笑い）。そのとき「しまった」と思ったね。やっぱり他人のものに黙って手を出しちゃいけないなってこと、鼻がかけたときに感じたね（笑い）。

井深 鼻が落ちたときにね、ハハハ。落ちるまでは？

本田 落ちるまでは、やりたい一心。自分の思ってるイメージを何とか実現したくてしょうが

ないんですね。

井深 芸術的なセンスがあるんだね。

本田 悪いことなんてねことは、ひとつも思ってなかった。「こんなことをする奴は宗一郎にきまってる」っていうんで、すぐ指名手配くっちゃって…（笑い）。そのころは修身があって、人のものには手を出さな、とか、いろんなこと教えてるけど、私はそうじゃなくて…

井深 悪いことして、はじめて修身がわかった（笑い）。

本田 自分なりに、体でそれを受けとめたね。

井深 石屋、おこったでしょ？

本田 まあ、しょっちゅうやってるからねえ（笑い）。“またやったナ！”（笑い）。

井深 しかし鼻落とされちゃ…接着剤もなかったろうしね。たしかに教育というのは、自分で自分の興味で築き上げていくところに、本当の教育があるし、進歩もあるような気がするね。

本田 親が教えることは大切だけど、教えるだけじゃなしに、子ども自体が、何か自分で興味あるもので実行して、いろいろ失敗する…失敗したときに、思い出し「あ、親がこういったな、先生がこういったな」…それで自分の体で受けとめる、と、いうところに、本当に教育があるんじゃないかな。

井深 与えすぎ、ばっかりではね。

本田 ちょうど、いまは、ほら…“知恵の肥満児”だな。

井深 うん、うまい！うまい言葉だ。

本田 体で、行動で消化もできんのに、教えるだけは教えてる。だから教えられても、それをどういうふうに応用していいか、適用する場所もないんだな。

井深 いまの学校教育全部がね、大学まで通じて、そうだよな。それで話はもとにもどってアート商会 子守りの時期がすんで、待望の自動車がいじれるようになったんですか。

本田 そう、私がアート商会へ行ったのは、学校をすませて、1月ほどして、5月でした。子守り、子守りの半年…すると、その年の暮れに大雪が降ったんですよ、東京に。まあ5、60センチ。むかしの自動車って、アンダーカバーって、エンジンの下を覆うカバーがあったんですよ、シャベルのようなでっかいカバーが。

井深 鉄板？

本田 ええ。バックするとそれへ雪がはいって、おっこっちゃう。「きょうは忙しくてしようがない。手伝え」っていわれた。しずくは上からたれるし、手はかじかむし…ワイヤーで結えつけるんですよ、自動車の下へもぐって。しかしそのときわたし、うれしかったなあ、これで自動車にさわれた！半年たって手が足りないため、子守りを解任されて、自動車の下へもぐれた。最低の仕事ですよ。だけど、そのうれしかったこと！ぼくは、うちではさんざんいろいろのものをいじっているし、器用さもあつたし、兄弟子よりぼくは器用だって、自負もしていたが、「この子、なかなかよくやる」ってそ

のときはじめて認められたね。そのうれしかったことって、いまだに忘れないなあ。最低の仕事でもね。だから、私は、子どもに対して“教える”ことも結構だが、やっぱり“苦労”っていうことがあってこそ、ちょっとの喜びでも、身に沁みるんだっていうことを世の親たちに言いたいなあ。

オモチャは全部自分で作った

井深 そのしたいことを抑えつけておく期間は、本当にいいことなんです。鈴木バイオリンで、子どもが最初習うとき、絶対、バイオリンに触わせない。お母さんが毎週連れて行って、最低3ヶ月位、バイオリンはさわらせない。そうすると自分より小さい子が一生けんめいやっているの聞いているから、曲はもう、全部頭へはいっちゃう。それでもさわらせない。

本田 へえ！

井深 そうすると、はじめは親の意志か、子どもの意志かわからないで行ってるんだけど、みんなやってるから、弾きたくなりますよね。それでもう矢も楯もたまらなくなる。そのときに、はじめてバイオリンを渡すわけなんです。

本田 はーん。

井深 このあたりがね、ちょっといまの世の中で欠けているような気がします。

本田 そうだね。たしかに欠けてますね。

井深 何でもすぐ始めて、すぐいやになってやめる。鈴木先生のところでは、新しくはいった子は、3ヶ月ほど通ってる間に、メロディはちゃんと頭にはいっちゃうから、何でもなく弾けると思っちゃう。ところがさて、バイオリンを持って見ると、ドッコイ、そうはいかんもんだから、こりゃ大変だっていうんで、ご飯も何も忘れて、かじりつくってということになる。それがイントロダクションなんです。

本田 ああ、わかるねえ。

井深 いまの自動車の下へもぐった話、非常にそれに通じるね。

本田 手がかじかんで、上からポタポタ雪が落ちてくる。寒いとか、つめたいとか、そんなこと問題じゃなかったね。仕事をしてるっていう意識さえないんだ。どんどん、どんどん…なにせ、面白くて…やっちゃってたねえ！堰を切った水みたいなものだなあ。

井深 それこそ、教育で考えなきゃいかんテーマだ。

本田 そういうものなんだね。

井深 今は、あんまりイージーに与えすぎで…

本田 与えすぎなんだね、たしかに、いまは。

井深 ほしくてほしくてしょうがないものを、やっとなら買ったという、そういう気持ちが必要な

んだけどね。

本田 本人はまだたいして欲しくないのに、「お前これほしいだろ」っていうのはサービス過剰だよ、子どもに対して。だから子ども、移り気になっちゃう。

井深 月賦販売なんていうのも、わけなくいろんなものが買えちゃう。私は大学出て勤めてから、ライカが欲しくてね。当時で180円ぐらいだった。月給は60円ぐらいだ。月賦なんてなかったから、どうしてもためなくちゃならない。半年かかった。その買ったときのうれしさ！ちょっとちがうね、月賦とは・・・

本田 ぼくがアート商會に勤めて、勤めたその月に5円もらったですよ、月給を。そうして、その月給で、日ごろ欲しいと思ってた帽子！あの運転手さんがかぶるあの帽子・・・学帽みたいなのに金モールのでかいのがついたの。

井深 あった、あった。

本田 あれをかぶりたくて、欲しくてしょうがなかった。下駄ばきで、神田神保町まで行って、とにかく2円30銭！もらった金の半分出したんだから(笑い)、大金ですよ(笑い)。

井深 アート商會ってどこでした。

本田 本郷湯島。そこから歩いて行って、買って、かぶって・・・金モールのなるべくでかいヤツを(笑い)、それで着物に下駄ばきにそれをかぶって、悠々と帰った。満足したなあ(笑い)。

井深 目に見えるようだね。ハハハハハ。

本田 自分が本当にほしかった、憧れていたものを、自分の手で買った・・・あれはもう生涯忘れないなあ。

井深 今の子はそういう体験はないなあ。

本田 親がすぐサービスしちゃうから。ぼくらはおもちゃなんて買ってもらったこと、いっぺんもないな。タコでも飛行機ダコでも、全部自分で、木を削ったり、竹を削ったりしてつくりましたよ。

井深 それに浜松も在の方じゃ、買うっていったってそうおもちゃ屋はないものね。

本田 おもちゃ屋ってのは、町へ出なきゃないですからね。それからまたね、おもちゃ屋で売っているようなおもちゃは、いらないんですよ。むかしのおもちゃはね、首振るおもちゃとか・・・たいしたことなくて、動的なものはないんですよ。ぼくの気に入ったのはないんだから。

井深 ぼくが育った安城という町も、当時から相当の町だったけどおもちゃ屋、なかったですよ。本屋は立派なのが2軒あったけど。ぼくが1番最初に買ってもらった遊び道具は、電気のベルね。青いコイルがついて、コーン、コーンとたたく、あのベルと電池と絹巻線を買ってもらった、それがおもちゃだったね、小学校の初めのころで、これは非常に印象深かったし、非常に役に立ったと思うけど。だけど、おもちゃ屋ってのはなかった、ほんとに。

東京にだって・・・ぼくは小学校1年の半分ぐらい本郷にいたけど、3丁目の角のところ

にあったのしか覚えないもの。ほんとに少なかった。だから何でも自分でこしらえなきゃならなかった。これは、いまの子どもたちと、だいぶちがうんじゃないかな。

本田 ちがうね。

ジーンときたスミス

井深 プラモデル買ってきて、接着剤でつけりゃ、かっこいいものが、スツとできちゃうのと、かっこ悪くても、自分で作ったのとはね。あのトランスなんかも、自分でこしらえたよ。中学校になってからだけど。売ってないんだもの。また、電話の古いの買ってきて、悪いとこ探して、いいとこだけチョン切って集めて、コンデンサーをこさえたですよ。なんでもかんでも、自分でこさえなきゃならなかった。そういうところに、ちょっといまの教育とちがうものが出てきたでしょうね。

本田 いまは既製品を組み合わせるだけだから、手は不器用になるよ、そりゃ。

井深 知識もそうかも知れないね。しかしきょうは愉快的話を聞いたなあ。もうひとつぐらい小学校のときの記憶はないですか。

本田 小学校5年ぐらいのときだと思うけど、浜松にアート・スミスって飛行機乗りがきてね。それがきたとき、何しろ、これ、見に行かなきゃいかん、と思ってね、親父に内緒で、2銭盗みだしてね。

井深 たった2銭。

本田 2銭たって・・・お祭りのときに、よその人が来て、もらう金ですよ、その頃。でっかい銅貨でね。何たって5厘しかもらったことないのに、大金だと思ってたよ（笑い）。そいつ盗み出して、弁当持って、学校へ行くようになかっこうして、納屋から親父の自転車持ち出して、三角ペダル踏んで、20キロのところ、浜松まで行ってたんですよ。人に聞き聞き・・・はじめて。

井深 へえ

本田 行って、入ろうと思ったら、5銭とか10銭とかいわれて、2銭じゃない足りないわけだ。しょうがないから、練平場のそとの木の上に登ってね、松の枝を折って、自分の下の方へ敷いて、下から見えないようにして、見物してた。そしたら宙返りをしたりして、おりてきた。ハンチングをこうしろにかぶって・・・

井深 そう、そう。

本田 それがたまらないんだ（笑い）。英雄に見えてね。

井深 私も名古屋まで見に行った。そのときはじいさんが連れてってくれたから、ちゃんとはいって、坐って見た。

本田 そいで私は帰りには学帽をうしろにかぶって（笑い）ハンチングの真似だ。うちへ帰

ってきて、おやじに言ったら、おやじ、おこらなかつたね。

井深 ホウ…

本田 「本当に行ってきたか」って、おやじも目を丸くしてた。

井深 そうすると、2 銭は残ったわけ。

本田 2 銭、とうとう使い途ないもの。弁当は持って行って、木の上で食っちゃったし（笑い）

井深 ハハハハハ。

本田 ところがね、世の中って不思議なものだね。この話にあとがある。今から 4 年ぐらい前だけど、アメリカから手紙がきましてね、「お前の著書を読んだけど、あのときの機関士は俺だ」という手紙がきた。

井深 ほう！

本田 「お前が登ったっていう松の木はこれか」ってちゃんと写真を入れて、ぼくのところへ送ってきたよ。でぼくも「ぜひ会いたいものだ」と言ってやった。そしたら、忽然と、3 日ばかりたったら、研究所に現れてね。

井深 へええ。

本田 いや、わたしゃ、おどろいたなあ。

井深 相当な年配でしょう。

本田 そのとき 19 だったって言ってましたっけね。はたちにならないと渡航できなかったんだって。それ、ごまかして日本へ来て、ずうっと、転々と日本中を。

井深 スミスと巡業だね。

本田 巡業して歩いたわけ。そして天竜川だとか、写真をいっぱい持ってきて見せてくれた。いや、私のうちが写ってるんですよ、驚いたね。私が「子どものとき、見に行った」と書いてだけで、アメリカの当時の人と、いま握手ができるんですよ。あのころは外国人とつきあうことになるとは夢にも思わなかったなあ。

井深 大正 4 . 5 年のことだから…

本田 うん。そしてこんど日本へ来たのは 4 年ばかり前。私より 9 つ上ですよ。だから…私が 10 歳ぐらいだったわけだ。

井深 どこに住んでるの？

本田 ロスアンジェルスに。いまもエンジニアやってる。子供のときにそんな因縁があつてね、この年になって、その人とつき合うようになるなんて、大変なことですよ。

井深 ぼくも、砂煙りをあげて滑走して、フワッととび上がるという感じだった、スミスの飛行機はよく覚えてる。

本田 体が前の方にあつてね、後にエンジンが回ってる。エンジンとプロペラを背中へしようような恰好で、前の方へ乗って…

井深 1 番さきっぽにね。

本田 そしてハンティング、うしろにかぶってね…恰好いいんですよ。ジーンと来ちゃったな

あ（笑い）

井深 何馬力だったかな。3、40馬力か…

本田 そんなもんでしょうね。

井深 写真はもう普及してたな。コダックとか…。いや、こりゃきょうは大変面白かった。

本田 地蔵さんの鼻をかいた話は私、本にも書いたけど、判をつくった話は初公開だ（笑い）。この間先生の顔みたら思い出した。博士のお祝いにきてくれて…あの先生の顔みたら、“そうそう学校、出来なかったなあ”と思い出して…先生も“学校できなくても博士もらえて、ああよかった、よかった”って言ってくれて…それで思い出した（笑い）。

井深 あれは、薄い紙にふつうに書いて、さかさまにはりつけてそれで彫るんだよね。

本田 そうなんだ。あとではそうやったけどね。

井深 あ！ また、やったのか（笑い）。